

財団法人  
日本性教育協会  
THE JAPANESE  
ASSOCIATION FOR  
SEX EDUCATION

## 現代性教育研究月報

◎ホームページ <http://www.jase.or.jp> ◎e-mailアドレス [info@jase.or.jp](mailto:info@jase.or.jp)

現代性教育研究月報第20巻第12号（通巻234号）2002年12月15日（毎月15日）発行 昭和62年12月1日第三種郵便物認可 定価1部150円 年間購読料1800円（送料共）発行所（財）日本性教育協会 〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 発行人 松本清一 編集人 畑 芳夫

もくじ	ジェンダー教育への提言	海外の性教育Ⅷ	12
	男らしさの形成と学校環境	今月のブックガイド	13
	伏見憲明のトークセッション③	JASEジャーナル	14

### ■ジェンダー教育への提言

## 男らしさの形成と学校環境

久留米大学文学部助教授 多賀 太

### はじめに

言わずと知れた事実ではあるが、犯罪の大半は男性によって行われている。平成13年の犯罪統計によれば、年間の刑法犯での検挙者32万人のうち79%が男性であった。罪種別では、殺人の82%、強盗の94%、暴行の94%、傷害の92%、脅迫の94%、恐喝の91%が男性による犯行である。最近社会問題化してきたDV（ドメスティック・バイオレンス）やセクシュアルハラスメントでも、加害者のほとんどは男性である。

一方、こうした加害者としてのイメージとは裏

腹に、男性中心社会の舞台裏で、男性たちはある意味で女性以上に追い詰められてもいる。警察庁発表の資料によると、1998年以降、日本の自殺者は年間3万人を超え続けているが、その7割以上が男性である。また、推定では年間1万人ほどが過労死していると見られているが、そのほとんどは男性である。

なぜ男性たちは、女性に比べて、他人を傷つけ、また自らを死に至るまで追い詰めてしまうのだろうか。男性たちの間に、何が起きているのだろうか。

近年、男女共同参画社会の実現をめざす政府や自治体の動きが活発化しているが、それらの多くは「女性のエンパワーメント」や「女性に

対する暴力の廃止」などのように、女性に焦点を当てたものである。一方、男性については、差別的な言動や暴力によって女性に危害を加える加害者として、あるいはこの男性中心社会において女性の犠牲によって利益を得ている存在として、非難されることはあっても、男性それ自体に焦点を当てた取り組みは非常に少ないように思える。

しかし、S・ボーボワールが女性について「女に生まれるのではなく女になるのだ」と述べたように、男性もまた周りの環境の影響を受けながらいまあるような男になるのだとすれば、男性のあり方を自明視するのではなく、それを社会的な文脈の中に位置づけて考えてみる必要がある。女性に対する差別や暴力をなくすためにも、男性の自殺や過労死を防ぐためにも、男性はなぜどのようにして差別的で暴力的になるのか、男性はなぜ自らを追い詰めてしまうのかを問い、そのプロセスを明らかにしていく必要がある。

このように、本稿では「男はつくられる」という観点から、男性たちの「病」を生じさせる背景について、特に学校環境における男の子たちの状況に焦点を当てて考えてみたいと思う。

---

## 男らしさの病

---

犯罪や自殺がこれほどまでに男性に偏って起きている理由や背景に思いをめぐらしてみると、そこにはある種の「男らしさ」と呼べるような男性特有の心的傾向の存在が見えてくる。

1つは、脅迫的なまでの他者に対する「支配・優越志向」、もう1つは、悩みや不満を自己の心の中に押しとどめようとする「感情の抑制傾向」である。

先にふれた強盗、暴行、傷害、脅迫、恐喝などの犯罪の発生原因はそれこそケース・バイ・ケースだろうが、それらの犯罪を一言でいい表すならば、結局のところ、他者を自らの意思に従わせたり他者より優位に立つために脅しや暴力などの卑

劣な手段に訴える行為であるといえる。その根底にあるのは、他者に対する支配・優越志向である。また、男性から女性に対して行われるDVやセクハラも、女性に対する支配・優越志向が暴力や性的欲望と結びついて発露されたものだといえるだろう。

一方、男性の過労死や自殺が多いのは、悩みや不満の表出を抑制しようとする男性たちの心的傾向が大きく影響しているからだと思われる。たしかに、就業者数に占める男性の割合が圧倒的に多く、男性の家族扶養義務の観念が根強い状況を考えれば（そのこと自体問題なのであるが）、男性の過労死や仕事を苦にした自殺が多いのは当然であるといえるかもしれない。しかし、妻にさえ悩みを打ち明けずに自殺していく男性や、過労死する前日まで自分は大丈夫だから心配するなど妻にいい聞かせていた男性の事例を見ると、やはり男性の自殺や過労死が多いのは、単に職場をはじめとするストレスの多い場に置かれているからだけではないように思える。それは、成人だけではなく、未成年でも男性の自殺者が女性の約2倍に達していることから推察される。

また、伊藤公雄氏によれば、1993年から95年の3年間に新聞でいじめによる自殺と報道された中高生の自殺のケースが27件あったが、そのうち女の子は4名だけで、残りのすべて、つまり8割以上が男の子であった。ところが、一方で、「いじめ電話相談」に電話をかけてくるのは圧倒的に女の子だという。このことから、成人のみならず子どもにおいても、男は他人に悩みを打ち明けず死を選んでいく傾向にあることが推測される。

こうした、「支配・優越志向」や「感情の抑制傾向」といった男性たちの心的傾向は、家族、学校、マスメディアなど、幼少期以来男性たちが置かれてきたさまざまな生活環境によって形成されたものだと考えられる。そこで次に、これらのうち学校に焦点を当て、男子集団内での相互作用を通して、こうした男性特有の心的傾向が形成されるプロセスについて考えてみたいと思う。

---

## 男子集団における 「パワー・プレイ」

---

イギリスで男子生徒の性差別をなくすための教育実践を行ってきたS・アスキューとC・ロスは、学校における男子間の相互作用の基調をなしているのは、地位と威信を求め競い合う「パワー・プレイ」だと述べている。学校環境は、学業やスポーツなどの公認されたフォーマルな活動領域と、それらによっても規定される人気や、外見のよさ、けんかの強さなどのインフォーマルな領域の両方において、男の子を競争へと駆り立てている。男の子たちは、男子集団の中で、競争に勝つこと、他人に優越することを自尊心の基盤にすることを学び、それによって男としてのアイデンティティを形成していく。

たしかに、学校が公認する学業やスポーツにおける競争には、男子だけでなく女子も参加する。しかし、女子にとって、それらの競争に勝ち抜くことが賞賛されてもそのことが「女らしさ」として評価されるわけではないのに対して、男子の場合は、それが直接「男らしさ」に結びつけられるという点で、両者にとって競争のもつ意味は異なっている。

例えば、共働きが増えたとはいえ、男性の家族扶養義務の観念が根強く残っており、いまだ「専業主夫」が市民権を得ない日本の現状では、男子の学業達成は将来の職業達成とダイレクトに結びつけられる。そして、「専業主婦」という選択肢があり得る女子に比べて、学業達成をめぐる男子の競争はよりヒートアップする傾向にある。

同じように、女子にとって、スポーツが苦手なことが「女らしさ」を否定するものではないのに対して、男子にとってスポーツが苦手であることは、自尊心の形成やクラスメイトからの人気を得るという点で、決定的なマイナス要因となる。かつて私は、スポーツができなくていじめられたり悩んだりした経験を男性同士で語り合うというワ

ークショップに参加したことがあるが（実は筆者も小学生のとき運動音痴で悩んでいた）、彼らの語りからは、現代社会において、いかにスポーツが「男らしさ」の感覚の形成に寄与しているのかがい知ることができた。

一方、インフォーマルな競争の中でも、外見、特に「美しさ」をめぐる競争は、「女らしさ」と矛盾しない数少ない競争のうちの一つかもしれない。しかし、女子はそうした競争と同時に、他者への思いやりや援助からも自尊心を引き出すことを学んでいる。それに対して男子の場合は、自尊心や他者からの承認の基盤が、競争的行動や競争での勝利にあまりに偏っているのである。

こうした競争的環境に常に置かれているために、男子は、おのずと隙あらば他者より優位に立とうとする態度の形成を促される。ある活動や集団において低い地位しか得られない者は、より容易に地位や威信を獲得できそうな他の活動や他の集団において、他者より優位に立とうとする。

「いじめっ子」が必ずしも成績の悪い生徒であるとは限らないが、少なくとも、学業やスポーツなどの学校が公認する活動で活躍できない男子にとって、「いじめ」や「からかい」は、他者より優位に立つことのできる手っ取り早い方法である。暴力や脅しも、腕力が弱い子や気の弱い子に対して優位に立つ有効な手段となりうる。いじめられっ子が別の子をいじめるというのも典型的な例である。

ところで、「いじめ」や「からかい」に関連して注目すべきなのは、他の男性を貶める際に、しばしばその男性を「女にたとえる」表現が用いられる点である。社会学者のR・W・コンネルは、男性内部での支配／従属関係の構築に用いられる典型的な方法の一つが、自らを「真の男性」に位置づけるために、他の男性に「女性化した男性」としてのレッテルを貼ることであると述べている。英語圏では、男性に対するけなし言葉として使用される語句の多くが「女性性」を象徴するものであるというが、日本語でも、「女々しい」「女

の腐ったの」というように、相手の男性を女性にたとえることで貶めるやり方がしばしば用いられる。こうしたやり取りを通じて、男の子たちは、自らが「真の男」たるために他の男の子を傷つけるとともに、知らず知らずのうちに女性蔑視の態度も身につけているのである。

---

## 権威主義的パーソナリティと「力」による統制

---

こうして一旦男子集団内の地位と威信が確定してしまうと、男の子たちは、今度はそうした力関係に敏感に反応し、それに沿って行動するようになる。そして、強者に服従する一方で弱者には支配的になるという「権威主義的パーソナリティ」を発達させていく。筆者がインタビューを行ったある公立中学校の女性教師は、自らが担任を務めるクラスの男子生徒間の力関係について、次のように述べている。

——男の子は、何かをしたいと思っても、ばあっと周りの力関係をまず見ます。それで、「力」の強い男の子がやりたいことをたぶんします。で、その子がするっていわなかったら、次の子（次に「力」の強い子）にその役目が回ってくるんです。

この前、体育祭の応援リーダーを決めてたんですね。誰になるのかなって見ていたら、やっぱり力関係のなかで力を持っている子が「じゃあ先生、俺がする」っていうんですね。で、その子が「おう、お前もせんか」って声をかけた何人かは（応援リーダーを）できるんです。で、声をかけられてない他の子は、心の底でやりたいと思っているもやりたいとはいいいません。その点、女の子は解放されています。女の子は、「えー、わたしやりたい」とか、結構「キャーキャー」っていうノリでいうんですよね。もちろん女の子の中にも、そういう子といえない子はいるんですけど、男の子ほど垣根が高くないんですよね。——

こうした権威主義的な「力」による統制という現象は、何も生徒集団内に限って見られるものではない。

アスキューとロスは、イギリスの中等教育（特に男子校）では、「強い」男性教師のみが男子を抑え、示しをつけることができるという考えが浸透していると述べている。日本の中学・高校でも、生徒指導主事は、「力の強い」男子生徒を制圧できる「力の強い」男性教師である場合が多いように思える。

さらに、筆者がインタビューを行った教師の勤務する中学校では、そうした「力の強い」男性教師たちが「力の強い」男子生徒に重要な役割を与え、「お前がみんなをまとめなくてどうするか、しっかりしろ」と彼らを励ますことで、反学校的な方向に発散されがちな彼らの「力」を生徒集団の統制においてうまく利用しようとしている事例も確認された。

たしかに、手に負えない暴力的な男子生徒を数多く抱えている学校側にしてみれば、「力の強い」男性教師による権威主義的な方法で学校内の秩序維持をはかるのは仕方のないことなのかもしれない。しかし、そうしたやり方は、結果的に学校内の男性支配をより強固なものとし、「男らしさ」と「力」との意味の結びつきをより強めることにつながる。そして、女性教師や女子生徒の地位は低められるとともに、「思いやり」「協力」などは「女らしさ」と結びつけられ、相対的に低い価値しか与えられなくなる。

こうした環境では、男の子たちは、ますます力関係に敏感になる一方で、他者への思いやりや協力を価値を見出すことが難しくなり、むしろ女性蔑視の態度形成が促されてしまう。

---

## 男の子を解放するために

---

以上は、いくつかの英語圏の研究と、筆者が行ったいくつかの学校での観察および教師へのインタビューから得た知見をもとにした素描に

すぎない。したがって、これが日本の学校における男子集団の一般的な像であるとは言い切れない。また、男子集団の特徴といっても、地域や、小・中・高校、公立と私立、男子校と共学校、偏差値ランクなどの学校タイプによって、かなり異なっているだろう。しかし、少なくとも、女子集団と比較した場合の男子集団の特徴のいくつかは描き出すことができたのではないかと思う。

このように見てみると、男子集団やそれが置かれている学校環境は、より広い社会の縮図のように思えてくる。男の子たちは、学校における競争的な男子集団での生活を通して、他者に対する支配と優越を絶対的な価値として学ぶとともに、そうした競争に勝ち抜いていくために、弱みを見せず強がることを覚えていく。また、周りの力関係に敏感に反応し、権威主義的なパーソナリティを発達させる。

それらは、競争的で序列化された現代の男性中心社会への適応過程なのである。しかし、まさにそうした社会への過剰適応の結果、先に述べたような男たちの病理が頻発しているのである。そう考えると、男の子や男性もまた男性中心社会の犠牲者である。彼らは、地位や威信という「男らしさ」を獲得し維持するために、計り知れないプレッシャーを受けているのである。しかし、そうした「男らしさ」の達成過程で、他の男性や女性を傷つけ苦しめているという点では、同時に加害者でもあるのだ。

では、男の子を女性や他の男性に対する加害者に仕立て上げないために、男の子自身を「男らしさ」のプレッシャーから解放するために、教師には何ができるだろうか。最後に3点だけ述べておきたい。

第1に、自らの「男／女らしさ」にかかわる思い込みにしたがって、知らず知らずのうちに男子と女子に違ったやり方で接していないか、今一度反省してみることである。例えば、おとなしくて控えめな男の子は、教師から「問題が

ある子」と見なされやすいが、もし彼が女の子であったとしても「問題がある子」と見ていたのだろうか。また、男子が暴力的であることを「男の子だから当然」と見過ごしていないだろうか。特に、暴力という反社会的な行動は男女に関わらず許されないという態度を子どもたちに明示することは重要だと思われる。

第2に、すでに身につけている性的なステレオタイプから解放されるとともに、男子と女子それぞれが不得意な資質を伸ばしていけるよう、子どもたちに働きかけることである。特に、男の子には、他者に対する思いやりや協力の大切さ、さまざまな感情を言葉で豊かに表現すること、暴力は決して許されないことなどを教えていくことが重要であろう。

第3に、何よりも増して重要なのは、教師がジェンダー・フリーの視点から自らの振る舞いや生き方を問い直し、自己変革を行うことである。教師は、子どもたちにとって、最も身近な大人の男性／女性のモデルである。意図的に教師が教える内容とは別に、教師のあり方自体が子どもたちの態度形成に影響を与える。

たしかに、固定化された男女の役割を自明視して長年生きてきた教師にとって、そうした自らの意識や行動を短期間で変更するのは容易なことではない。しかし、たとえ完璧でなくてもいい。教師自身が自らの「男／女らしさ」へのとらわれと格闘しつつ自己変革への努力を続けている姿勢を示すことこそが、男の子の「男らしさ」にとらわれない態度の形成にとって、最も効果的な教育なのではないだろうか。

#### 参考文献

- 伊藤公雄『男性学入門』 作品社 1996  
S・アスキュー／C・ロス『男の子は泣かない』  
金子書房 1997  
Connell, R. W., *Masculinities*, Polity Press 1995.  
多賀 太『男性のジェンダーの形成』 東洋館出版社  
2001